

なったときに初めて、農家は摘果をやめて、キュウリをそのまま育てると。そうすることによって、キュウリのお母さん、つまり苗は1日2リットルぐらい、人間と同じぐらい水を飲むんですが、より寿命が長く、つまり生産者にとっては、長く生産できる、収穫できるということになります。それが収入につながると。全部もの言わない相手に対して、僕らはそれを常々感じて、見て、それが農家の腕だと思っていますし、僕が一番付けなきゃいけないスキルだと思っています。

最後に、家庭で食育するには、さっきの西居さんの話にもありましたが、やはりが僕らはきっかけをつくることが大事だと思っています。その中で、植物がこうだとか、野菜がこうだとかということを一回ちょっと外してみても、僕は野菜や農業を伝えるだけじゃなくて、野菜や農業で伝えるということをやってみたいと思います。それは野菜や農業をツールにして、国語や算数や英語を畑でやりたい、そのように思っています。実際問題、1回やっています。そこでALTの先生や、障害を持ったから、世代間交流で、3世代4世代の方を、同じ畑において、そこで皆さんで同じ作業をしながら交流を図っていただく。そういうようなダイバーシティな場が設けられるのも、畑や田んぼの大きな魅力の一つだと思いますし、それがきっかけとなって、食卓にのぼった野菜に関して、親子でのコミュニケーションツールの一つになってくれればなと思っています。

○西居氏： はい、ありがとうございます。

○設楽氏： 以上です。

○西居氏： じゃあ柿沢さん、最後お願いします。

○柿沢氏： 面白いですね。畑で国語・算数っていうのが。

○西居氏： キュウリ2+ナス3はとかですか。簡単すぎますか。

○柿沢氏： いや、それ本当に私もそれすごい常々思っていることで、ちょっと私がいましゃべりたいことが、これから自分がやりたいなと思っていることと、誰かやってほしいなと思っていることというか、私の力ではとても及ばないというか、なかなかお店やりながら食育というのもずっとできるわけではないので、長い時間かけられることでもなかったりとかするので、いろんな方たちが一緒にやってもらえたらいいなことなんですけど、一つは学校において、自炊力をつけてもらうというので、家庭科の授業ってあると思うんですけど、私の世代だと、男子がやらなかったりしたんですよ。女子だけでとか。小学校はやったんですけど、中学になると技術・家庭とか分かれて。

でも、自分で食べるものを作ることで、一番の大事なことだと思うんですね。生きる知恵・生きる力だと思うんですけど、どうしてもお受験だったり、学業優先の世の中なので、うちの親も料理あんまり教えてくれなかったんですね。やっぱり勉強してほしいから。料理はいつかやるだろうぐらいな感じで。たまたま私は料理の仕事に就いたので、いまやっていますけれども。やっぱり勉強してほしいから、そこに手を煩わせたくないから、教えないみたいな感じだったんですね。なので、私はある意味反面教師だったんですけど、やっぱり家庭の中でもですけど、学校でももっと自炊をできる力を、男性にもつけてもらいたいと思っています。さっきお話ししていて、「料理、自分はできない」とおっしゃっていたんですけど、やっぱり男性も料理ができること。例えば大学に入って自炊しなきゃいけない。一人暮らしをして、でもできない。はい、外食とかになっちゃうわけじゃないですか。若いからすぐに体調には出ませんが、10年後・20年後の体に出ると思うんですね。いま若くして亡くなる方も多いですし、原因は食に限らないかもしれないんですけど、やっぱり自分で自分の身を守るということのは、食にできることだと思うので、その自炊力をつけるという、家庭科の授業増やせるかといわれると、どうなのかなって思うと、さっきおっしゃった、ほかの勉強もしながら、そういうことができるといいなというのをさっき聞いて、なるほどと思ったんですけど、もうとにかく自炊力をつけるような教育を学校においてすれば、みんなができるかなというのと、あと国においてしてほしいなと思う、国といたらいいのか分からないんですけど、兵役じゃなくて農役という、ちょっと過激なんですけど、それに近いこと。

なんか変な言い方かもしれないんですけど、私たちが育ったときは、本当農業が全く見えない。逆に見えないようにしていたんじゃないかなぐらいの、農業の実態であったり、大変さというのを、あえてカバーをかけられているというか、何となく職業選択の中に、さっきパティシエが1位と言いましたが、農業・農家っていうのが入ってこないじゃないですか。そういうのっていうのは、農業を知らないからであって、もしかしたら、ちゃんと

知ること、もっと農家になりたい子供とか増えると私は思うんですね。

なので、ちょっと過激な言い方ですけど、1週間だったらあれですけど、本当は1年ぐらいやってほしいですけど、農家に行って農業体験する機会というのを、ちゃんと収穫だけじゃなくて、長く持つというのがもしできたら、食に関しての勉強もできて、食べることの大切さも知れて、さらにそういった職業選択も自由になって、もっと農業というものを身近に感じられるんじゃないかなと思っていて、でもそれがなかなか私主導ではできないことなので、なんかそういうことができたらいんじゃないかな。前にありましたけど、「農家を憧れの職業にする」っておっしゃっていましたが、本当そうなり得る仕事だと思うんですよ。格好いいんですよ、農家さんって。実際行くと、個性的だったり、皆さんすごく一生懸命やられていて、そういうところに触れる機会がもっともっと増えたら変わってくるんじゃないかなというふうに思いました。今日さらに。

○西居氏： そうですね。素晴らしいです。本当小学校5年生の子で、臨海学校ってありましたが、海を体験してシーカヤックをしたり、あれはたぶん公立小学校だから、たぶん全国一律どこでもやっていると思うんですが、あれの臨農学校のような、何年生児かにまとめて3日間か4日間、農家のお世話になって、必ず公立小学校に通った人は、農家の暮らしを4日は最低見ると。そこから興味を深めていくようなことができるといいですね。

制度として、私たちは立場あるわけではないので、すぐにはできませんけれども、みんながそういうふうなことをやりたいというベースを持って、じゃあ制度がなくともできることは何なのかと考えて行動できると、いい社会になるんじゃないかなと思います。すごい長い時間にわたって、皆様にお話しいただきました。私の話の中でなかったのは、オリンピック・パラリンピック、4年後ですか、開催されますけど、それがすごくチャンスだなと思っています。もしかしたら、最後というところで語弊があるかもしれませんが、和食が無形文化遺産になったり、食にいま注目をされていて、4年後に世界のお客様を迎える。それってというのは、じゃあ自国のことって知っていたっけ、節句って知っていたっけ、お米知っていたっけ、そういうふうになる人たちがすごく多くなるチャンスだと思うので、そのときにぜひ自分の食を振り返っていただいて、考えを直していただくような、高めていただくようなこともしてほしい。あと自炊力という話がありましたけど、本当に作る力があれば、もっと興味を持って、しょうゆは薄口もあるのかとか、だしてじゃあ顆粒じゃなくて昆布と鰹っていうのでやっているのか。椎茸にもあるんだとか。そういうふうに興味のきっかけを生み出す自炊力があれば、どんどん深めていくことができるので、それを養ってあげるというのも、すごく大切なミッションなのかなと思います。

あとは皆さんの最後のまとめを聞いていて、まとめの中に私入れ損ねたなと思ったのは、私含めて、たぶんやっている人が全員楽しそうだなというふうに感じていただけたかと思うんですけど、やっぱりこっちが楽しくないと、楽しいことは伝えられないと思うので、自分が楽しめる環境をつくるというのが、もしかしたら一番最初に必要なのかもしれないですね。そんな形で、きょうのまとめとさせていただければと思いますが、今日はちょっと質疑応答の時間とかも設けてはいないんですけど、先ほどまとめた通り、ぜひ皆さんそれぞれの立場で、半歩の歩み寄りを起こさせるきっかけづくりをそれぞれでやっていただければと思います。パネリストの皆さん、今日はどうもありがとうございました。拍手をお願いします。

○司会： 西居様、パネリストの皆様、ありがとうございました。有意義なディスカッションをしていただきました皆様に、もう一度盛大な拍手をお願いいたします。ご参加の皆様、ありがとうございました。それでは、以上をもちまして、終了とさせていただきます。